アートが生まれるとき

第4回

アロイーズ・コルバス

1886〜1964年　スイス生まれ

このコーナーでは、
毎回アール・ブリュット(※)の
作家を一人取り上げ、
滋賀県立美術館ディレクターの
保坂健二朗先生に、
ご紹介いただきます。

※アールブリュットとは、「生(なま)の芸術」を意味するフランス語で、評価や流行とは関係なく、「つくりたい」という衝動から制作された独自の表現を指します。

数奇な生涯

アロイーズ・コルバスは、1886年、スイスのローザンヌに6人兄弟の一人として生まれました。小さな頃から物語の筋や登場人物を暗記するほどオペラが好きで、夢は歌手でした。11歳のとき母親が亡くなると、長女のマルグリットが家族の中で力を持つようになります。やがてアロイーズは裁縫の専門学校で学び、働くように。25歳の頃には近所に住む男性と恋に落ちます。しかしマルグリットがこれをよく思わず、二人の関係を引き裂くべく、アロイーズはドイツへと送られてしまったのでした。

そのドイツでアロイーズが働くことになったのは、なんと、第3代ドイツ皇帝が暮らすサンスーシ宮殿。仕事は、宮廷付司祭の子供たちの家庭教師だったのですが、オペラの世界が好きだったアロイーズにとって、宮殿で働くのは楽しかったことでしょう。アロイーズが皇帝の私設チャペルで歌を歌うこともあったとか。

しかし、やがてアロイーズは精神を病んでしまいます。1913年、スイスに帰国。いくつかの仕事をする中、1917年、皇帝に恋文を送ります（実際に会ったことはなかったと言われています)。翌年、統合失調症と診断され、精神科病院に入院。1920年には慢性の患者用の病院に転院し、亡くなるまでそこで暮らしました。

作品の特徴

そんなアロイーズが絵を描き始めたのは1919年のこと。最初は鉛筆だけでしたが、翌年には色を使いながら本格的に描くようになりました。宮殿で見た豪華な装飾、彼女が大好きだったオペラ、そして雑誌や書籍などで見たであろう絵画。記憶の中にストックしてあるさまざまなイメージを自由に組み合わせて描くのが、彼女の方法でした。ピンクやオレンジを基調にした画面に描かれているのは、結婚式などロマンティックなシーンがほとんど。女性の髪はボリューム感たっぷり。何より目を引くのは、人物が皆、アーモンド状の形の、水色の目をしていることです。色としては美しいのですが哀しげでもある。それが見る人の胸を打ちます。

画面の形状が多様なこともポイントです。実はこれ(❶)、糸で縫ってあるのです。裁縫を仕事としていたこともあるアロイーズは、自分の描きたい光景にあわせて、画面のフォーマットを自由に変えたのでした。

大事だった自発性

最初は理解されず捨てられていたアロイーズの作品ですが、そのうち、関心を持つ医師が現れ、やがて病院の外でも紹介されるように。アール・ブリュットという言葉をつくったジャン・デュビュッフェも、その作品に興味をもち、実際にアロイーズに会いに何度も病院に来たことが知られています。デュビュッフェの考えるアール・ブリュットでは創作の自発性が重要になるのですが、アロイーズには次のような極めて興味深いエピソードがあります。

1960年代に入ると、アロイーズの評価は確固たるものとなり、作品の値段も高くなりました。このことを受けて、1963年10月頃、地元の自治体がアロイーズのために専属の作業療法士をつけたのです。制作をスムーズにさせるための計らいだったのでしょうが、この作業療法士が、アロイーズにこういう絵を描いてはだめだといったり、タイトルや日付、サインをつけろといったりしたそうです。確かにタイトルや日付があったほうが管理上は楽なのですが、その結果どうなったか。アロイーズの作品から、明らかに生気が失われていってしまったのでした。

このエピソードが意味すること。それは、芸術的創作に随伴する者は、制作にスピードや、取り扱いのための常識を求めるのではなく、制作者のやりたいことや自発性を、ただただ見守るべきだということではないでしょうか。ちなみにアロイーズが亡くなるのは1964年4月のこと。考えさせられる事実です。

保坂 健二朗 ほさか・けんじろう

滋賀県立美術館ディレクター(館長)。1976年茨城県生まれ。慶應義塾大学大学院修士課程修了。東京国立近代美術館主任研究員を経て現職。著書に『アール・ブリュット アート日本』(監修、平凡社)など。滋賀県立美術館では「人間の才能 生みだすことと生きること」展(2022年)を企画。



photo : Claude Bornand　Collection de l'Art Brut, Lausanne　no inv. cab-1393

❶《聖カトリーヌの結婚》　色鉛筆、紙　62×87㎝　制作年不詳

サイズが微妙に違う2枚の紙を縫い合わせて、そこに結婚の光景を描いた作品です。
右の女性の胸元には小さな人物像が見えます。左の人物は、肩章のついた赤い服の上に青いマントをはおっています。二人の間にはパイプオルガンがあり、その右や前には花が広がっています。
オルガンの奏でる祝福の音が、花へと変化していくかのようです。



photo : Déraz Morgane, Atelier de numé risation - Ville de Lausanne　Collection de l'Art Brut, Lausanne (Suisse)　no inv. cab-16300

❷《プランタードのキス》　チョーク、色鉛筆、紙　59.8×42.5㎝　1951〜1960年

女性の頬に、緑の服を着た人物がキスをしています。
二人の頭上には果物(オレンジ)と緑の葉によるリースがあって、そこからリボンが垂れています。
黄色、オレンジ、緑、紫、青と
色数がそれほど多くはないのも特徴。



photo : Olivier Laffely, Atelier de numé risation - Ville de Lausanne　Collection de l'Art Brut, Lausanne (Suisse)　no inv. cab-2144

❸《無題》　色鉛筆、厚紙に印刷した写真　24.5×16㎝　1941〜1951年

アロイーズは既存の写真に直接描くこともありました。
ここでは、いかにもスイスらしい、
急な二つ山の間のくぼみに、水平に横たわる顔が
一つ、その右に、山の斜面にもたれる感じの
もう一つの顔が見えます。



photo : Claudina García, Atelier de numé risation - Ville de Lausanne　Collection de l'Art Brut, Lausanne (Suisse)　no inv. cab-16301

❹《無題》　チョーク、紙　286×47㎝　1962年

五つの画面。中央の画面は中央に女性が、
その右に飾りのついた木(おそらくモミの木)、
左にはクジャクが見えます。
空白が生じるのを恐れて埋め尽くそうとする
アロイーズの特徴がよく現れています。

令和8年度版高等学校『美術1』
P.20には、アロイーズの作品が
掲載されています。

掲載作品はアール・ブリュット・コレクション蔵(スイス)